

2019 年度秋季大会実施報告

大会・企画委員会, LOC

秋季大会実施報告 (大会・企画委員会)

2019 年度秋季大会は、京都市の京都大学吉田キャンパスにおいて、9月16日(月・祝)～18日(水)に開催され、821名(会員626名 非会員195名)の参加がありました。プログラム確定後の講演発表数は口頭224件、ポスター229件の合計453件で、このうち口頭発表2件、ポスター発表2件がキャンセルされました。そのほか、若手学術奨励賞受賞者3名による記念講演がありました。

今年度の秋季大会では、3日目に地震工学会との合同特別セッションとして「長周期地震動—その生成から構造物の応答、社会の対応まで—」「南海トラフ巨大地震(基調講演・パネルディスカッション)」を開催しました。また、「地震学における機械学習の可能性」「オープンデータと地震学」の2件の特別セッション、「2019年6月18日山形県沖の地震」の緊急セッションが開催され、活発な議論がなされました。

講演申込、事前参加登録と、参加登録料及び投稿料の支払いは、ウェブサイト上で受け付けました。今年度からシステムが変更となり、予稿投稿締切後に、オンライン決済期間を設けました。事前参加登録済みかつ年会費納入済みの会員には、名札と領収書を事前送付し、当日は大会受付を通らずに入場できるようにしました。また、講演予稿集は電子版のみとし、事前参加登録をして頂いた会員には、予稿集ダウンロードのためのURLとパスワードをプログラム公開時期にあわせて連絡しました。

今年度も、大会1日目の午後に、若手学術奨励賞の受賞者による記念講演を設けました。大会3日間ともに4会場同時並行で口頭発表のセッション(受賞記念講演を除く)を行い、大会1日目と2日目の夕方、3日目の午後にポスター発表のコアタイムを設けました。口頭発表の時間は、原則として1件あたり15分(講演12分、質疑3分)としました。

今年度も、学生による優れた研究発表を奨励し、研究発表技術の向上を目的とした「学生優秀発表賞」の審査をしました。口頭発表とポスター発表のどちらも対象です。今年度の審査員には理事、代議員、大会・企画委員会委員から29名が選出され、82件の発表を審査しました。選考結果と受賞者については、ニュースレター前号22ページに発表されています。

秋季大会の準備、運営面では、京都地域の地震学会員からなるLOCの皆様にも全面的にお世話になりました。LOCの皆様の献身的なご尽力により、京都大会が円滑に運営さ

れたことに、大会・企画委員会から心よりお礼を申し上げます。

さて、来年度の秋季大会は那覇市の沖縄県市町村自治会館・琉球新報ホールにおいて、2020年10月29日(木)～31日(土)の日程で開催される予定です。今年度に引き続き、会員の皆様の積極的な投稿・参加を期待しております。

最後になりましたが、各セッションの座長および学生優秀発表賞の審査員をお引き受けくださった皆様のご協力に感謝申し上げます。

LOCからの報告

1. 秋季大会

今回の秋季大会は、9月16日(月・祝)から18日(水)の3日間、京都大学吉田キャンパスにて開催しました。LOCは2009年秋季大会に続き10年ぶりに、京都大学に所属する会員が担当しました。

近年、京都を訪れる外国人観光客が急増しています。とくに例年秋季大会を開催する10月となると、京都市内はますます混雑し、会場の確保、参加者の宿泊所不足や市内の移動の困難が予想されます。当初から10月以降は避けるというのはLOCでの一致した意見でしたし、学外の会員からも同様のアドバイスを多数頂きました。混雑を避けて9月開催とすることは既定の方針でしたが、スケジュールが例年より1ヶ月早まることで、JpGU終了後あまり間を置かず投稿締め切り時期となることなどが懸念されました。幸いにも今年から電子投稿システムが導入されたため、締め切り時期をほぼ従来通りに設定することが可能となりました。大会企画委員会の皆さまに感謝いたします。

会場の選定も、当初LOC内では奈良市に新しくできた会議場を推す意見もありましたが、連携して開催する日本地震工学会との調整もあり京都大学を会場とすることに決まりました。

大会の会場として、京都大学吉田キャンパス内に5会場を設けました。百周年時計台記念館1階百周年記念ホール(A会場)、国際科学イノベーション棟5階シンポジウムホール(B会場)、総合研究8号館3階NSホール(C会場)、百周年時計台記念館2階国際交流ホール(D会場およびポスター会場)を使用させて頂きました。この他に、国際科学イノベーション棟5階ホワイエに団体展示コーナーを設けて、13団体から出展して頂きました。2009年大会では百周年時計台記念館と東大路通をはさんだ芝蘭会館の間が

遠く離れており不便でしたが、今回はお互いに隣接する3つの建物に会場を集約することができました。それでも会場間の移動には一旦戸外へ出る必要があり、なにかと不便をおかけしたことをお詫びします。

学内の施設をかき集めて安直に会場を確保したと思われるかもしれませんが、これらの施設は各々独立した学内組織によって運営されており、予約や使用に関する事務手続きなども各々異なっており「横のつながり」は全くありません。LOCとしては言わば「学会3つ分」（予備としてもう1箇所予約したので「4つ分」）の会場手配をする必要があり大変苦勞いたしました。

平日に参加することが困難な会員もおられるということで、近年は大会期間の一部に休日を含むように設定することになっており、大会初日の16日は敬老の日の祝日を充てました。しかし、祝日にはキャンパス内では大学生協の食堂が営業しません。大学周辺の飲食店も休日は定休日としている所が多いため、昼食をとることが困難ではないかと心配されました。事前に学会のニューズレターやメールニュースで、お弁当を持参されるようにお勧めしましたが、昼食に困った会員もおられたかもしれません。また、会場にも問題が発生しました。C会場のある総合研究8号館は、休日は玄関ドアがロックされることが開催1週間ほど前になって判明しました。特別に玄関ロックを外して頂くようお願いしましたが、認められません。急遽、会場係のアルバイトの中から1名を玄関前に「ドアボーイ」として配置することで凌ぎました。2日目以降は平日でしたので、これらの不便は解消されました。

最終日18日(水)には、日本地震工学会との合同セッションが企画されました。百周年時計台記念館1階百周年記念ホールにて、午前中は「長周期地震動」の合同セッション、午後は「南海トラフ巨大地震」をテーマに両学会長の基調講演に続いて招待講演および講演者らによるディスカッションを行い、専門分野の境界を乗り越えた活発な議論が行なわれました。なお地震工学会の秋季大会は、地震学会に引き続き19日(木)20日(金)の両日、国際科学イノベーション棟を会場に開催されました。

大会2日目17日(火)夕刻には、京大生協吉田食堂にて懇親会を開催しました。山岡会長のご挨拶につづいて久家副会長による鯛の塩釜割りなどで大いに盛り上がりました。大林大会・企画委員長、次期LOC代表の中村衛会員にもご挨拶を頂きました。総勢162名と多くの会員のご参加を頂いたおかげで、前年からの繰越金に若干の黒字分を加えて次回LOCに引き継ぐことができました。

複数の建物にまたがる大会会場における公衆無線LANの需要に応えるため、今回はeduroamのビジター用アカウントを用意しました。期間中70名以上の会員が利用さ

れました。

2. 一般公開セミナー

今回の秋季大会は、平成時代が終わり新たに令和となって最初の大会となりました。例年秋季大会にリンクして開催している一般公開セミナーは、大会に先立つ9月15日(日)13時より、JR京都駅前のキャンパスプラザ京都の5階第1講義室にて開催しました。テーマは平成の30年間をふりかえり「平成の大被害地震を振り返る」を選びました。講師は、京都造形芸術大学の尾池和夫学長、東北大学大学院の松澤暢教授、京都大学防災研究所の西村卓也准教授にお願いし、各々1995年兵庫県南部地震(阪神淡路大震災)、2011年東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)、2016年熊本地震に焦点を当てた講演をして頂きました。それぞれタイプの異なる3つの地震と、それらによる災害の様相の違い、今後も検討を要する学術上および防災上の問題点などについて、一般の参加者にもわかりやすく解説して頂きました。一般からは133人名の方がご来場になりました。

また同日午前中には、同じくキャンパスプラザ京都の4階第3演習室において「地震の教室」が開催されました。親子向け教室「地震計を作って、ゆれを測ってみよう!」および学校教員向け教室「小中高の授業ですぐに使える地震を教える教材紹介」という2つの内容で実施しました。親子向けに数組、教員向けに18名の参加者がありました。家庭でも手に入る身近な材料を使って、地震計の自作や、建物の構造による地震動の揺れの違いを体験する簡単な実験などを紹介し、地震現象の正しい理解を促すとともに、防災上の注意点をわかりやすく解説しました。

LOCとしては、3年前に京都開催のお話を頂いてから時間的に余裕があり、具体的な準備を始めるまでのんびり構えていました。直前時期にはかなり泥縄式ではありましたが、LOCメンバーの奮闘によりなんとか大過なく大会を終えることができました。学会事務局、大会企画委員会、地震工学会LOCはじめ、会員各位、関係者の皆さまに感謝申し上げます。

LOC：西上欽也、片尾 浩、加藤 護、野田博之、土井一生、山田真澄、直井 誠、松島信一、浅野公之、澁谷拓郎、西村卓也、伊藤喜宏、飯尾能久、久家慶子

受付・会場係としては、京都大学防災研究所、総合人間学部、理学部、工学部の院生および学部生、ならびに阿武山観測所のサポーターの皆さんにアルバイトとして協力して頂きました。

今大会は、京都市および公益財団法人京都文化交流コン

ベンションビューローの助成金を活用し実施しました。

大会プログラムの修正（大会・企画委員会）

○発表のキャンセル

S03P-04 Ground deformation induced by a strong squall line: A case study in the Weihe Basin, North China

#Yang Xiaolin (Shaanxi Earthquake Agency), Wei Zigen (Chinese Academy of Sciences)

S04-01 南海トラフ地震発生帯掘削計画（IODP 358 次航海）におけるプレート境界断層に向けた超深度ライザー掘

削：達成と今後

木下正高（東大地震研）・木村学（東京海洋大）・廣瀬丈洋（JAMSTEC）・山口飛鳥（東大大気海洋研）ほか

S09-07 海洋リソスフェア内地震のb値の歪速度依存性：低歪速度下における応力不均質の進行の可能性

篠島僚平（京大防災研）・伊藤武男（名大環境）

S14P-02 中国陝西省韓城地殻変動観測所顕著地殻が異常傾斜の要因分析

楊小林（陝西省地震局）・危自根（中国科学院）・潘存英・楊俊芳（陝西省地震局）